

山大聖火リレー

山形大学で学んだこと、過ごした日々、
それらはやがてさまざまな成果となって、社会に燦々と火を灯す。
現役山大生やOBたちが各方面で活躍する姿を追った。



1 診療所の診察室で患者さんを迎える松田先生スマイル。その穏やかな表情に患者さんの気持ちも自然とほぐれる。先生に診てもらった患者さんたちが、心から発する「ありがとう」が松田先生の新たな原動力に。



2 「日本医師会赤ひげ大賞」の賞状。5人の受賞者の中で最年少ということもあって「過分な賞です」と謙遜しきり。診療所でごんばっている全員でいただいた賞であり、自分はその代表に過ぎないと強調する。

3 大学2年の時に自転車北海道旅行をした時の写真。体力には自信があったが、さすがに石北峠越えはきつかった。この時に「北海道はいいところだな」と思ったのがきっかけで、北海道大学の医局に進むことを決意。

外来診療にとどまらず、訪問医療にも尽力。 献身的な医療活動で、第一回赤ひげ大賞を受賞。

松田好人 名寄市風連国民健康保険診療所 所長

「子どもの頃は体が弱くて、よく医者への世話になっていました。だから、将来は自分も医者になって患者さんの役に立ちたいと思うようになり、それ以外の職業は考えたこともありませんでした」と、医師になった動機を語るのは、現在、北海道名寄市の診療所で所長を務める松田好人さん。岐阜県出身の松田さんは、高校時代までを東京で過ごし、その後は山形、北海道へと移り住む。「スキーが好きだから」とにこやかに話すが、地域医療の将来に対する危機感から、医師が極端に少ない北海道北部に自ら飛び込んだ。しかも、診療所での外来診療だけでも手いっぱいにもかかわらず、介護施設や個人宅への訪問診療も引き受けている。昨年からは医師2人体制になり、

ずいぶんラクにはなった。しかし、患者さんからの要請にはできるだけ応えたいとの思いが強く、いつでも対応できるよう待機している。冬には氷点下20度を下回る極寒の地で、大雪の日でも患者さんのもとへ駆けつける。患者さんやそのご家族、看護師らスタッフからの信頼は厚く、気さくな人柄に人気も高い。

その献身的な働きぶりに日本医師会が目目し、地域の医療現場で長年にわたり、地域住民の生活を支えている医師を顕彰する「日本医師会赤ひげ大賞」の創設第一回の記念すべき受賞者の1人に選ばれた。5人の受賞者の中では最年少だったが、賞は診療所でごんばっている全員でもらったものと考えて、至って謙虚。受賞したこと以上

に、地域の人々や患者さんたちが喜んでくれたことが一番嬉しかったという感想にも、松田さんの人間性がよく表れている。

「サイクリングや大好きなスキーを楽しむことに一生懸命で、あまり勉強熱心な方ではなかったですね。よく追試も受けていました」と大学時代を振り返り、優秀な学生ではなかったことを強調するが、さまざまな経験を糧にしてきたことは想像に難くない。そんな松田さんから後輩たちへ一言。「いろんな考えを許容する柔らかさを備えた人間になってほしい。そのためには、自分と価値観の違う人とも積極的に交わることで」地域医療に貢献する松田さんの今後に、ますます期待したい。

懸命の成果